

松本きみゑ(大阪大学大学院)

久松真一(1889—1980)は千利休の教えを『山上二記』・『南方録』等々を基に茶道の哲学を明らかにしている。そこで私はこの論文で千利休の教えを哲学の方向から検討し、利休の求めた本当の姿を取りだしたい。

「日本の文化的使命と茶道」では茶道の急務は、茶道の本義である侘びの精神に徹して、それを生かして、新しい創造の主体を確立することである。それには、茶に関心を持っているものが、まずその急務をよく自覚して侘びの精神を自他に生かす仕方を工夫することである。茶道は日本特有の総合的文化体系であり、それは日本人の生活の生活全般の根幹をなしていることを明確に論じている。

「茶道における人間形成」は久松が思索した東洋独自の人間形成論である。しかもそれが茶道において実現されることを自らの体験を通し、精密に論じている。真の茶道文化は形なき自己、覚者の自己表現であるという。茶道を学ぶことによって仏教を学び、覚者となるという人間形成論が展開されている。

「茶道文化の性格」として(一)不均斉、(二)簡素、(三)枯高、(四)自然、(五)幽玄、(六)脱俗、(七)静寂をあげ、かかる7つ性格を統一した本質的に一なるものがある。この一なるものとは「無」である。茶道文化がその根源を創造的主体的「無」にあるとする独自の考えを述べる。茶道的創造的精神とは無である。無は観賞するものではなく創造するものである。一切のものを創るものである。かかる茶人になることが茶道の真髄である。茶道によって人間の道を行ずるのである。さらに、『禅と美術』において、「無」が内に生きる創造的主体を禅的人間と呼称し、その性格を(一)無法、(二)無雑、(三)無位、(四)無心、(五)無底、(六)無碍、(七)無動の7つに分け、これらは禅文化の七つの性格と相当する、と論じているのである。これは久松の禅芸術論の骨子となるものである。

「茶道の玄旨」茶の湯の諸法は茶道の個別玄旨によって創造され、しかも個別玄旨はどこまでも根源玄旨の端的な発露として用き、一体不二なるものである。よって日本茶道にあってはこのことが自覚的に要求され、そして、このことを原理として日本茶道は侘茶(「茶湯風体ハ禅」『山上二記』)として成立した。特定の文化形成の原理として根源玄旨の端的な発露性が自覚的に礎定されている文化は、文化形態をとった限りにおける宗教としての「禅宗」と「侘茶」以外にはないと述べる。さらに、個々三昧と王三昧との違いを明らかにし、諸芸が個々三昧であるのに対し、茶道は王三昧であると明言している。

「芳躅」とは、一般に先達の芳しい教えや行実と解されているが、久松は『臨濟録』の「見、師と斉しきときは、師の半得を減ず。見、師に過ぎて、方に伝授するに堪えたり」という語を引用し、「芳躅を攀じる」とは茶道においても単に師の教えを体得するのみではなく、師を超え自ら創造するというはたらきを持つようになることがその真の意味であると説く。「好み」には二つの意味がある。既成の事物の中から茶道の規範に合うものを択びとること、茶道の規範に合うものを新

しく創造することを明確に示し、新しい茶道創造のためには自律的規範である作意の必要不可欠であることを力説している。

「侘数寄」の真意を歴史上のいくつかの文献を通して考察し、それが一般に解釈されているような道具のない茶という意味ではなく、その中に宗教、芸術、学問、道徳等々の様々の文化を包括する一つの総合的文化体系即ち茶道を創造し形成する生きた主体であると解明し、これを絶対無的主体、主体的無、創造的無と名付けている。侘数寄の主体をはたらく無、創造的無と強調するところに久松の茶道論の真髓が表れている。

「心悟」とは、物にも、心にも、仏にさえも繫縛されることなく、まったく相無くして一切の相を現じながら、現ずることによって、現じたものにも、現ずること自身にも束縛されることなく、空間的に無辺に世界を形成し、時間的に無限に歴史を創造する絶対主体の自覚であるとされる。

「一期一会」という意味を単に茶道の世界における言葉としてのみなく、人生を意義あらしめる上で不可欠の心構えであると説く。生きているということの根本的な意味は、仏性即ち本来の真の人間性に覚めることにあるのであり、一期一会の精神はこの仏性に覚めるためのものにほかならない。久松の人生哲学がにじみでている。

「事理」ではまず、茶道の極意、こつ、極則、利休の「心の一つがね」が悟りの表現に他ならないことを論じ、「心の一つがね」とは究極においては人間の「心の一つがね」に帰すべきものという。これが最も究極的な意味における理であり、そこから自在のはたらきとして出てくる一切の現象が事であり、理と事とが一体不二である最も根源的本来のあり方が成り立つと説く。従って、「事理双修」とは茶道という一つの特殊なわざの理と事ではなく、全体的人間の事理であるという。

「事理双修」の姿を身をもって示したのが利休である。利休は単に茶道という一つ芸の「心の一つがね」をわきまえたのみではなく、これを人間性の根源にまで深め、そこから、その表現として、茶道を基礎づけた。そこに利休が居士として高く遇せられたゆえんである。道を悟って、そこから道としての茶道を創造したともいえる。

さらに「茶道の玄旨」について、久松は単に茶道のみの玄旨に限ったことでなく、人間の根源玄旨でもあると強調している。老子の「玄之又玄、衆妙之門」が書かれており、道に到達する方法を述べた章である。また、賛玄第十四章は「之を視れども見えず。名づけて夷と曰う。之を聴けども聞こえず。名づけて希かと曰う。之を搏けども得ず。名づけて微と曰う。此の三者は致詰すべからず。故より混じて一となる」。道は無色・無声・無形はこの三者が混然一体となつて一となるものである。人間のあらゆる感覚的知覚的把握を超えながら、万象の根源に実在する、その不可思議な形而上学的性質を説明する。上記を総合すると茶道の本来あるべき姿が明らかになるので、ここから私は千利休の教え(侘茶)を日本文化論に位置付けをしたい。

#### 参考文献

拙論文「人間の文化形成 千利休の「型」と西田幾多郎の「形のない文化」『比較文化研究』No. 139 2020年